

Eureka X

六年制通信 No.36 令和5年2月17日(金)号

量 vs 質

5日の日曜日は大変でした。私は藤井聡太五冠のファンなのですが、棋王戦の第一局があるしNHK杯のベスト4をかけた試合の放映があるしで忙しかったわけです、ファンとしては。棋王戦五番勝負を制すれば六冠王になるのです。すごっ。で、まあ二局とも勝利されたので嬉しかったわけですが、二時間で二手しか進まない画面をじっと見つめているのも辛いので、文庫本を手にしながらの応援でした。藤井五冠は二十歳の青年ですが、あの若さで多くの含蓄ある言葉を残しています。AIが人間を凌駕する時代に棋士としての存在理由は何かと問われた時、まだ高校生だった彼は「人と人が戦う盤上の物語は不変だ」と言い切りました。棋聖位奪取後の記者会見の場だったと記憶しています。会場が感動に包まれ静まり返ったのを私も画面越しに見ていました。また、最近では「たとえAIの方が人間よりも車の運転が上手だとしても、それが人間が運転を楽しんでほしくない理由にはならない」とも言ってらっしゃいました。勝っても決して驕らず謙虚な発言を続ける姿には頭が下がります。素敵ですね。

AIの進歩で将棋の世界(囲碁の世界もそうでしょうけど)はずいぶんと質が変わったと言われます。いわゆる常識とされてきたものが次々と覆されています。人間同士の長い戦いの歴史の中で、ここでは先手が有利あるいは不利と結論づけられた局面ですら、AIに深く読ませるとまだまだ工夫の余地はあると。ですから古いとされる戦法が見直され、どんどん進化しています。現代将棋にはかつて人間が出した結論を越えた、AIに出会う前の棋士の感性では捉えられないような質の変化が見られるわけですから、AIに学んで強くなる棋士でないとタイトルを獲得できなくなるわけですね。

ではAIは人間のなしえなかった質の変化をどのようにして将棋界に起こすことができたのでしょうか。それは、江戸時代からこれまで人間が行ってきた何万という全対局を遥かに凌ぐ数をAIが経験したからに他なりません。機械は疲れを知りませんからね、AI vs AIで何億局と指し続けることができます。そういった膨大な量が質を変えてしまったのです。この「量は質を変える」というのは将棋の世界だけの真実ではありません。私たちが運動競技でもピアノでも何かの技術を習得しようとする場合、あるいは外国語や数学の勉強をするとき「量は質を変える」は体感として正しいと思うに違いありません。質が変わるといえるのは、表現が難しいのですが「いきなりのジャンプ」のようなもので、ついさっきまで全くできなかったことが、ちょうど自転車に乗れるようになったときのように、突如としてできるようになる、あの感じです。そして、できてしまえば、どうして今までできなかったのかがわからない、そんな経験を多く

の人がしているのではないのでしょうか。モノにもよりますが、できない場合はたいていやり方の工夫の問題ではなくて、ただ単に量が足りないだけですね。

「量は質を変える」ことについて、私は一つのイメージを持っています。壺の中に一滴一滴水が落ちていく映像です。これを真横から見ているとどのくらい水が溜まっているのか全く分かりません。しかし必ずいつかは溢れ出ます。壺に入る水は最初は一滴ずつでも、それを継続していると一滴が二滴三滴と増えていき、やがて水は勢いよく壺に注ぎます。そしてある一線を越えた時、水は溢れる。これが私の「量が質を変える」イメージです。前にラスト・ストローの話をしました、最後の一本を乗せるまで、私たちにはラクダが限界に達しているかどうか分からないということ。溢れ出るまでは、壺にどのくらい水が溜まっているかがわからないのと同じように。質の変化が起こるまでは、まるで何事もないかのように全く変化がありません。ここが悩ましいところですね。恩師はよく「言語を勉強していると徐々にわかるというよりは、ある日まるで突然カーテンが開いたような、ぱっと視界が開けるようなわかり方をする」と仰いましたが、これ、言い換えるとカーテンが開くまでは暗いままの状態が続くということです。この、勉強しても暗いままの状態を、脳科学者の茂木さんでしたっけ、「silent period」と言っています。「沈黙の期間」とはうまい表現です。確かにこの期間は、人によって違うのですが誰にでもあると思います。問題は私たちがこの「沈黙」に耐えられるかどうかです。しかもこれ、自分の「沈黙」ですもんね、よけい耐えにくく思います。しかし、耐えるというよりは止めてしまわないことが大切です。水が溢れ出すのに要する時間は人によって違います。でも、止めなければきっと溢れますよ。

今週のおすすめ

・岩波文庫編集部編 『読書のすすめ』 (岩波文庫)

これ、1997年に出版されていますから今から四半世紀前なのですね。阿部勤也から始まって養老孟司まで、37篇のエッセイが収められています。ほとんどが学者か作家です。読書に縁のある人々と考えられますからね。

今になって、若い頃にもっと本を読めばよかったと思います。若い君たちが羨ましいよ。いつも言うように、人類が紡いできた物語の海は広大で、数多くの名作が残されています。できるだけ、感性豊かな若者に読んでほしいと願っています。

読書には苦い経験があります。学生時代に恩師から「これ面白いね」と勧められた南方熊楠の『十二支考』(東洋文庫)が面白いどころか難しくて遅々として読み進められなかったのです。不惑の年になってようやく楽しく読めた記憶があります。

このエッセイに「偏食ならぬ偏読の癖が治らない」という言葉があって、いや全くその通り、こうも好き嫌いがはっきりしていると読書の幅が狭くなって困ると日頃から思っていたので、こんな大学者(誰の言葉か探してごらん)でも偏読の癖があるのだと何だか少しホッとしました。ちなみにその方はテレビタレント、俳優、野球選手、力士などに対しても好き嫌いがはっきりしているそうです。私もです。

BGMは YMO のライディーンでした…。